

『聖ジュリヤン伝』をめぐる二、三の問題

岩 見 至

一

一昨年筆者は『『聖ジュリヤン伝』雑考』と題する小論^①を書いたが、文字通りの雑考で不備不明の点がかなりあった。その後十全な検討をなしえないまま今日に至っているので、本稿は上記小論の補遺補註の如きものにならざるをえなかったことをお断りせねばならない。二、三の問題について若干の再考を試みるが、掲載誌が異なるので便宜上まず上記拙論で述べたことを簡略に提示しておく。

まず筆者の単純素朴な問はフロベールの作品 *La Légende de saint Julien l'Hospitalier* という題名におけるロスピタリエの意味乃至意義はなんであるかということであっ

た。聖ジュリヤン（ユリアヌス）と呼ばれる人物は複数あって識別のためにロスピタリエの語が添えられるのであり、その限りでは些細なことである。オスピタリエを「人を歓待する」ととるか「慈悲深い」ととるか、やや漠然と両方の意味あいを含ませて理解するか、邦訳を参照すると、オスピタリエという限定を故意か偶然かオミットするものと、歓待派と慈悲派（別に流派があるわけではないが）の三者がある。そのいずれが妥当であるのか。

原作の末尾には「以上が私の故郷の教会のステンド・グラスにはばこのまま描かれている聖ジュリヤンの物語である」というよく知られた一句がある。ほぼこのままとあるが、ルーアン大聖堂のステンド・グラスの図柄は作品の筋と必ずしも一致しない、むしろ大きな相異もあれば不明な

部分も多い。そこでこの作品の源泉論が生ずる。源泉の一つと目されるものは黄金伝説 *la Légende dorée* で、前記小論ではそれが一般に普及した形の要約として二例を引用した。ジュリヤンが狩人で、雄鹿から両親殺しの予言を受け、それをさけるべく逃亡するが結局あやまって両親を殺し、償いの行為のため、のち聖者に列せられる点は二例に共通している。

作品の大筋は右の要約の線に沿って、第一章が生い立ちと予言と逃亡、第二章が放浪と栄光と急転直下の両親殺し、第三章が放浪と苦行の果ての絶対的献身と昇天へと結晶する。荒涼たる河岸の茅屋で、肩も胸もやせた腕も鱗のような膿疱でおおわれ、額には深いしわがぎざまれ、骸骨のように鼻の部分に穴があき、青ざめた唇からは霧のように濃いい、胸のわるくなるような臭い息を吐き、氷のように冷たい癩者を、裸になって口と口、胸と胸、脚と脚を合わせて暖めてやるジュリヤン。突如星のように男の眼が輝き、吐く息はバラのようにかくわしくなり、男の身体がぐんぐん大きくなり、壁がくずれ、屋根がとびさり、蒼穹がひろがり、——ジュリヤンは主イエスと向いあって昇天して行った。深い感動を与えるこのラスト・シーンについて、リルケが『マルテの手記』の中で述べている言葉を引用しておいた。

「そこまで思い切ってやれるかどうかが決定的なこのように僕には思われるのだ」と。

最後に再度オスピタリエについて、その語は十五世紀では「好んで人を受け入れる *accueillant*」と「慈悲深い *charitable*」の両義があり、ロベールは後者の実例としてフロベールのこの作品のタイトルを示しているので、筆者の疑問は疑問にならないといえるかも知れない、と述べ、なおかつそれにこだわらず、再度読み返してジュリヤンの行実を検討した。そして、第三章で、苦しみの遍歴のあと遂に大河のほとりに来て半ば泥に埋もれた小舟を見つけた時の彼の決意。...et l'idée lui vint d'employer son existence au service des autres. この部分を筆者は「他人のために自分の全存在をささげようという考えが浮んだ」と解したつまり原文では格別強調されていない *existence* を全存在と把握することにより、オスピタリエは「慈悲深い」の義が「人を歓待する」の義よりはるかにふさわしいのであると合点したのである。

二

以上略述した前記小論の不備不足な点を再考するために、前記小論でもふれたが、B・F・バートの『聖ジュリヤ

ン』はどこから」という論文の冒頭で指摘されている諸源泉の区分を差当り利用することとする。即ち(一)何よりもまずフロベールの生から、(二)黄金伝説から、(三)ルーアンのステンド・グラスから、(四)一九世紀の学識者の著作から、(五)その他多くのものから、といっている。パートはその論文ではまず(四)の項目についてのみ論じているのだが、これらの項目立ては適切であると思われると同時にそれらはある程度相互に関連しており、全く別々に孤立しているものではないということもいまでもないであろう。

まずフロベールの生から、とはいかなる意味か。未完の長編遺作『ブヴァールとペキュシェ』製作の苦業の間を縫って、いわば息抜きとして、かつ姪の生活上の難題に対処しなければならぬ状況の中で書かれた、ということがある。彼の故郷ルーアンの大聖堂にはジュリヤンの生涯を画いたステンド・グラスがあり、それをテーマにした作品化は久しくフロベールの念頭にあつたもので、一八五六年には五部構成のプランも試みているのである。実際に執筆に着手したのは一八七五年九月で翌七六年二月に脱稿し、引続いて書かれた『純な心』『エロディアス』と共に『三つの物語』として刊行されるのが一八七七年四月である。下書き以来約二十年を経ている。それらの年号と約二十年

という数字に何等かの意味を認めることができるか。『聖ジュリヤン伝』執筆の前年一八七四年には決定稿『聖アントワヌの誘惑』が完成する。これは四九年の初稿に始まる第三稿で、五六年の第二稿をはさみ前後二十五年を要している。彼のモノマニヤックなまでの製作欲と無限なまでの推敲彫琢による遅筆は周知のことであるから、約二十年の数字もさほど驚くには値しないといえる。年号の方はどうか。故意か偶然か、上記の年号のあたりに聖者を扱った作品が連続して出現するわけである、もっともアントワヌとジュリヤンという二人の聖者は全く異ったタイプであるが。フロベールがある意味で宗教に関心を持ち、キリスト教のみならず仏教や回教その他の諸宗教にも研究の目を向けたことがあるのは周知のことで、一種の絶対志向はあるものの、あくまで知の対象としてであり、更にはそれはつまるところ彼の芸術に美に奉仕するものとみなされてきたのが、従来の一般的理解のように思われる。特にキリスト教に対する彼の反感嫌悪はつとに指摘されたことであるが、上記の年号に結びつけて意識されたことはなかったようである。要するに、聖ジュリヤンの心底、真摯卒直に行ぜられた絶対的な愛のキリスト教的宗教的律動は、単なる美的関心のみでは産み出されえない、本物の魂のあり

ように示しているのではないということ。純粹に美的構築としてのみであるならば、リルケの言葉は空しいものとなるほかない。登場人物と作者を同一視しない注意は無論常に必要であるが、今はリルケの「君はフロベールが『修道士聖ジュリヤン』を書いたのを偶然と思うか」という言葉を信じたいと思う。

年号については、参考のために『聖ジュリヤン伝』成立を中心に年表を掲げておく。

この年表が示すのは、聖者が登場する作品が『道徳的秩序』の時期と相応するということのみである。しかしこの時期の彼の書簡を考慮に入れると、時期の相応は単なる偶然とはみられないであろう。いくつかを年次順に列挙してみる。

「……ああ何という世界に我々が入ってゆくのでしょうか。多神教、キリスト教、俗物宗、これが人類の三大進化です。悲しいことに我々は第三の時代の初めにいるのです……。」(一八七一年 G・サンド宛)

「……普仏戦争は私に……大きな打撃を与えました。……畜れたフランスは決して中世紀から逃れられることはいないのです。まだコミュニケーションというゴチック風思想

フロベール		政治・キリスト教	
一八六九	「感情教育」刊 クロワツセの家独軍占拠	四七歳	第一回ヴァチカン総会議*
七〇			普仏戦争
七二			パリ・コミュニケーションを経て 第三共和制
七三	母死	五〇歳	
七四	「聖アントワヌの誘惑」刊		マクマオン首相就任演説*
七五	姪の夫破産。* 「聖ジュリヤン」執筆		マクマオン大統領就任
七六	「聖ジュリヤン」脱稿。「純 な心」「エロディアス」		第一回総選挙
七七	「三つの物語」刊	五五歳	五月十六日事件* ピウス九世死。マクマオン 辞任
七八	マザラン図書館客員司書* 急死(脳溢血)	五八歳	教育・教会分離令

* (一八六九—七〇) 信仰と教理に関する教皇無謬説が宣告される。

** この中で『道徳的秩序』*l'ordre moral*なるスローガンが定立され、マクマオン政府はウルトラ・モンタニズムの頂点である第一回ヴァチカン総会議の意義の世俗化の推進役となる。

*** フロベールは愛姪のために全財産を投げ出す。

**** 王党派の勢力挽回策としてマクマオンは強権により下院の解散を断行。

***** 友人たちがフロベールの経済的苦境を助けるために斡旋した職。

ルーラモ・ルドルオ

に低迷しているのです。……この後に来るべきけちな反動はどうでしょう。さぞまた坊主どもがのさばることでしょう。……」(一八七一年 G・サンド宛)

「……「共和国はすべての争論を超越したもの」というのは「法王は誤ることなし」というのと同じです。いつになっても公式です。相も変らぬ神様です。……もはや原則は止めにして、科学の検討のなかに入るべきときです。……カトリック教徒たちは重大な危険に処するとき、何をしましたか？ 彼等は十字を切って神や聖者の加護を祈ったものです。ところで我々は進歩したなどと言っているが「共和国万歳」と叫んで九二年の思い出を想起するのです。そして誰も成功を疑いません。どうです。……」(一八七一年 G・サンド宛)

「……科学アカデミーが教皇の代りにならない限りは、……社会はホラ話のガラクタの山にしかならないでしょう。」(同上)

「今はすっかり教訓的著作に夢中です。デュパンルー^③貌下や現代イエズス会士の著作を吐き戻すほど一杯読んでいます。万事来夏とりかかる本を目ざしてのことです。」(一八七三年 E・フェイドー宛)

「どうして君は巡礼の^④ことで激昂するのか。普遍的な

愚行は驚くべきことではないよ。……」(同上)

「一国民全体の神経をさかなですることができるようか。民主的な八十年の発展を否定するなんて……」(一八七三年 カロリーヌ宛)

「宗教あるいはカトリシズム……といった言葉はもはや当代の精神的要求に対応していません。……十九世紀はあらゆる宗教が亡びるのを見ることになっているのです。アーメン。私はそのことで少しも嘆きません。」(一八七五年 サンド宛)

「……御承知のように私は大作を離れ、三十頁にも満たない一寸した中世風のつまらぬものを書きますが、これは私を現代世界よりも清潔な環境におき、私を元気にしてくれるのです。」(同上)

「私はブヴァールとベキュシェを放棄しました。……それで何かをするために小さなコントを書くことにつとめます。ルーアンの大聖堂のステンド・グラスに画かれている伝説です。せいぜい三十頁ばかりの小さなものですが、専念するためであり、まだ文章が書けるかどうかみるためです——疑わしいのですが……。そして今は過去のこと、再び戻らぬ一切のものを考えています。果しないメランコリーの中にくるまっていますのです。」

(一八七五年 ツルゲネフ宛)

「……世間通用の観念と反対に、カトリックのブルターニユは全然カトリックとは思えません。コンカルノでは漁師たちは日曜日に海へ漁に出るのです。」(一八七五年 ラポルト宛)

「私は技術的な細部や地方の情報、結局事柄の歴史的で正確な側面は大変二次的なものとみています。私が求めているのはなかなか美しく美なのです。」(一八七五年 サンド宛)

「私は(三日もかかって)聖ジュリヤン伝のプランの半頁を書いた。もしそれを知りたければ、ラングロワのステンド・グラスの絵についてのエッセイをとってみなさい。」(一八七五年 カロリーヌ宛)

「それにつけても、もし私がつづけるなら私は聖堂の灯明の一つになり、御堂の柱の一つにもなるでしょう。聖アントワヌの後、聖ジュリヤン、ついで洗者の聖ヨハネと、私は聖人たちから抜かれられません。洗者聖ヨハネは教化的にならないようにしたいと思っています。」(一八七六年 デ・ジュネット夫人宛)

「私を支えるのはブルジョワの愚しさが私に与える憤慨です。秩序の大方針により今日要約されるその愚かし

さが目がくらむほどになっています。歴史の上で、五月十六日^⑤より馬鹿げたことがあったでしょうか。」(一八七七年 サンド宛)

「ル・アーヴルで地質学に関する講演が禁止されました。ディエップではラブレールについての今一つの講演もそうなのです。それはまさに犯罪ですよ。」(一八七七年 デ・ジュネット夫人宛)

「私はテンプルの上に三冊の祈禱書、二冊のカテキスム、『キリストにならいて』等を置いています。そして新年まで宗教に没頭するでしょう。」(一八七九年 ブレヌ夫人宛)

「私は宗教と呼ばれるものに次第にうんざりしてきました……。なんという虚しさ。そしてまたなんという厚かましさ。」(一八七九年 デ・ジュネット夫人宛)

「三ヶ月来、現代の宗教書しか読んでいません。……こういう題材ではアマチュアの域を少々上回ることは確かです。さて、なんと、心臓が不快感で飛び出しそうです。ピウス九世、彼はカトリシズムにとって極めて有害だったでしょう。彼が庇護した信仰は忌むしいものです。サクレ・クール、サン・ジョゼフ、マリアの御胎、サレットなどなど。それは異教の末日のイシスやペローネの

礼拝にも似ているのです。」(一八七九年 X夫人宛)

以上極めて部分的な引用にすぎないが、通覧すればほぼ晩年の十年間、宗教特にカトリックがフロベールの大きな関心の的であったことがわかる。しかもオルドル・モラーを基盤にした現実的な政治政策や教会政策に過敏な反応を示しているのである。やや饒舌で、主観的、私憤的でないこともないが、私的書簡としてそれなりのリアリティを持ち、年を追うて彼の心理が急迫をつげてゆく様子がみられる。カトリックに対する憤懣や批判は、『三つの物語』の刊行やその成功によって、いささかも軽減されてはいない。従ってもし八十年に急死していなければ、あるいは聖者をテーマにした——とりわけ救済を志向した——作品を更に製作したかも知れないが、仮定のこととしていえば、その作品もやはり美的な構成から抜け出ることにはなかったであろう。そのことは、当代のカトリシズムを批判はするが新しいカトリシズムの創出への可能性を見出すことが彼には不可能であるからだというよりも、ギユマンもいうように、フロベールにとっては芸術家と司祭は同じ機能をもつ者だからであるだろう——眠っている者を目覚めさせ、生きる者に糧^{かて}を与え、炬火が消え此岸の霧が天上の星晨を

かくすことを許さないという機能を。

三

次に黄金伝説に關して若干補足したい。『黄金伝説』*Legenda aurea* と後に——十五世紀頃から——いわれるようになる著作は、一二九八年にジェノヴァの大神父として世を去ったヤコブス・デ・ヴォラギネの集成したラテン語散文によるキリスト教聖人伝集である。分量的にはほぼ旧新約聖書の全体に匹敵し、時間的にはキリスト教の千年以上に及ぶ全精神史を包含し、地理的にはアジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸にまたがり、異教伝承や土俗信仰も摂取しながら、多くの聖人^{アジエグラーフ}伝作者たちの手を経た、いわば聖書の続編ともみなされるものであるという。ヤコブスが少くともこの著作の主要部分を書き終えていたのは一二六〇年代の後半とみられているが、当時の慣習として表題もなく、著者名や章名もなかった。以後写本の数も多く、流布の過程で脱落や挿入も多々生じたことがうかがわれる。仏語訳は十四世紀以来いくつかあるとされるが、一三四八年のジャン・ヴィニエによるそれが成功してひろまったといわれている。前記小論を書いた時点では『黄金伝説』は未見であった。そこでフランスで流布している聖ジュリヤ

ン伝の二例を辞典から抽出して示すことで当座の責をふさいだのであるが、その状況は甚だ遺憾なことに現在も変っていない。フロベールが参照したであろうと思われるのは一八四三年に刊行されたブリュネの訳であろうと推測されるが、筆者未見である。それ故次善のこととして、次の底本の邦訳を参照することとする。

Jacobus a Voragine: *Legenda aurea*. Vulgo *Historia Lombardica Dicta*. Recensuit de Th. Graesse. Dresden 1890.^②

それと知らずに父母を殺したユリアヌス（ジャリヤン）の項の全文は註に示したが、ルーアン大聖堂のステンド・グラスとの関聯で、黄金伝説の記事を簡条書にしてみると、以下の如くである。(1)貴族の若者ユリアヌスが森へ狩に出かけ、鹿を追いかけたが、ふりむいて「あなたは両親を殺すはずなのに、なぜ私を追いかけるのか」と問う。(2)若者は驚き、その実現を恐れて逃亡する。(3)遠い土地である領主に仕え、騎士に任ぜられ、ある城の女あるじである貴族の寡婦をめとらせられた。(4)若者の両親は息子の失踪を悲しみ、探し求めて遍歴、遂にユリアヌスの城にゆきつく。(5)彼は留守であったが、妻は二人が夫の両親であることをさとり、二人を自分たちのベッドに寝かせた。(6)翌朝早く、

彼女が教会へ出かけた間にユリアヌスが帰り、夫婦のベッドに二人が寝ているのを見て、妻の不貞と思いこみ、二人を剣で刺し殺してしまう。(7)家を出ると妻が教会から帰ってきたので驚き、間違いを知って泣きぐずれて言う。「鹿の予言を成就させてしまった。ここを出てゆく、さようなら、この罪のつぐないをはたすまでは、決して安らぎをえられない身だ」と。(8)妻は苦しみいっしょに分ちあいたいといって二人は旅に出、遠い国へゆく。(9)危険な川のほとりに宿を建て、渡し守りの仕事をし、貧しい人たちを誰でもそこに泊めた。(10)長い歳月ののち、ある寒い夜中、川向うから呼ぶ声がした。(11)ユリアヌスはその人を渡し、かついで家に帰り、火を焚いた。(12)なかなか暖まらないので自分のベッドに連れて行ってあたたくふとんを着せてやった。(13)ほんのしばらくすると、その人はベッドから起き上り、らい病人のように見えていた人がまばゆい輝きのなかに天にむかつてすくと立ち上りこう言った。「わたしは神からあなたのところにつかわされた者です。神があなたの贖罪を聖寵をもってお受け入れになったことをお伝えします。」言いおわるなりその人の姿はかき消えた。(14)ほどなくしてユリアヌスとその妻は、多くの善行と慈善とに飾られて主のもとにみまかった。

以上ユリアヌスの行実を十四項にまとめたが、龐大な『黄金伝説』の中ではないわゆるへ欲待者のユリアヌスにあてられた記述は極めて簡略なものであり、^⑧その中でも生国逃亡以前の記述は極度に簡略である。

次に『聖ジュリヤン伝』の、作者の〈自称〉源泉であるルーアン大聖堂のステンド・グラスについて再見する。実物はもとよりフロベールの故郷ルーアンの大聖堂にあるので彼自身何度となく見ていることは、『ボヴァリ夫人』にもその描写があることでわかるが、細部についてはラングロワの著作にのっているラングロワ嬢の作製した図形の記録を熟視したことであろう。それは全部で三十四の図柄からなるが最上部の三図は天使及び天帝であるから省くと、一代記に関係するのは三十一図である。ほぼ中央の第十七図に両親殺しの場面がある。前記小論で述べたのは、親殺しの場面はあるが大鹿はおろか動物は馬が二頭と下方に魚が数匹いるだけだということ、意味のよくわからない図柄も多いということのみであった。図柄の全体を目前にしないという理解がしにくいことだが、一代記として下方から上方へ展開していることは容易に察せられるとして、とりわけ水平面にある三つの図柄の事象の先後は必ずしも明快でない。各図にラングロワ父娘がつけた番号のつけ方も整然と

はしていない。意味不明の図柄にあえて推測を加えて番号をつけたものと解される。ルーアンの大聖堂も十三世紀の建造であり、今日の建築と異って建築期間も長かったであろうし、種々の伝説が複雑に入り交ったであろうことは想像にかたくない。先にみたように『黄金伝説』自体においても生国逃亡以前の記述は極度に簡略なのである。そこにステンド・グラス製作者の理解乃至想像の入りこむ余地は大きかったとみななければならない。ただ両親殺しの実現がユリアヌスの生涯を大きく二分するといえるから、その場面がほぼ上下の真中にあるのは妥当な配置といえよう。そしてそれより上方については、即ち先の伝説の要約の(6)以降^⑭までは概ねそれに該当する図柄がみられるのであるが、ラングロワも困ったように、夫妻昇天直前の第二八、二九、三〇図に悪魔が描かれていて視る者を惑わすのである。下方については、要約の(3)(4)(5)についてはそれと了解しうる図柄がみられるが(1)(2)については該当図が見当らず、しかも図柄としては十図が描かれている。繰返していえば大鹿の両親殺しの予言乃至それに類することをあらわすような図柄は見出しがたいのである。

ここで、両親殺しの場を中心に、『黄金伝説』、ステンド・グラス、『聖ジュリヤン伝』の三者を並列してその異同

を際立たせてみよう。

黄金伝説	ステンド・グラス	聖ジュリヤン伝
大鹿の予言	同上(第十二図の推定)	隠者の予言
逃亡	同上	ジブシーの予言
武勲	同上(第十二図の推定)	同上
領主により貴族の寡婦をめとらせられる	結婚(第十一図の推定)	同上
両親彼等の城に至り着く	同上	オクスタニヤ皇帝の娘を嫁にめとる
誤解から両親刺殺	同上	同上
夫妻城を捨てて	同上	同上
宿を建て渡し守となる	同上	ジュリヤン一人城と妻を後にする
寒夜川向うの人を助け介抱	同上	あばらやで渡し守となる
癪者のような人、神の聖寵を伝える	同上	同上
ほとんど夫妻主のみもとにみまかる	同上	癪者を抱擁して暖め共に昇天する(癪者は主イエスであった)

右の表からみられることは、細部の異同はともかくとして、少くとも源泉の主要な二者であるステンド・グラスと黄金伝説と、フロベールの作品との最大の相異点は、両親

殺しの後、放浪苦行の生活におもむいたのは夫婦揃ってであったか、単独であったかという点にある。『黄金伝説』によれば、「鹿の予言を成就させてしまった。こうなつてはもうお前の良人でありつづけるわけにはいかない。わたしはここを出ていく。さようなら。いとしい妹よ。わたしは神に対してこの罪のつぐないをはたすまでは、けつして安らぎを得られない身なのだ。」というユリアヌスに対し、妻はこう言う、「そんなことはけつしてさせません。いとしい兄さま。わたしを置いてあなたをひとりで行かせるわけにはいきません。と申しますのは、これまであなたが幸福でいらつしたあいだずっとおそばにいたわたしですもの、苦しみもいっしょに分ちあいたいのです。」

カトリックの教義からいってもこれは極めて妥当ないい分であろう。フロベールの才を以てすればこの線上でもあるいは感動的な結末をえがきたかと想像されるが、彼はあえてユリアヌスに孤独の道を歩ませた。従来この点はまだ問題にされていないように思われるが、そこにはフロベールの相当な思いがこめられているように感じられる。

フロベールは生涯独身であった。これは多分その病気の故であろう。そこで結婚、あるいは夫婦というものに對してなにがしかのコンプレックスを持っていたとみて差支え

ない。あるいは少くとも夫婦がともに極限状況に立つという場面を想像することができなかったのではないか。癲者に身体を重ねあわせて暖めてやるということは、ユリアスが単独であればこそ可能だったことだ。自己犠牲あるいは捨身による奇蹟の実現のためには、カトリックの内包する一般的倫理乃至偽善的常識を突破せずにはおれない内心のたかぶりがあったとみるべきであろう。

四

「身体中を走り廻る神経痛の苦しみ、どうにもならない憂愁、〈何もかも空しい〉という感情……」一八七五年五月のサンド宛のフロベールの手紙は上のような言葉で始っている。五十歳をすぎれば誰しも身体的不調は免れなくなるものだが、病気がその人の全体に大きく影響することはよくあることだ。フロベールの場合も周知の一例である。

二十二歳の時の発作が人生を二分したと彼自身^⑩っている。その病は何か。「てんかん」説と「神経症」説があるが、興味深いのはサルトルが後者を探り、それをフロベールの家族内の原始史によって説明されるとし、その大前提に立ってその人格構成を語り、更にその作品（特に『ボヴァリ夫人』との関係を遡行的・前進的方法によって理解しよう

としたことである。その成果あるいは苦心のあとがサルトル晩年の大作『家の馬鹿息子』ということになるわけだが、その副題「ギュスターヴ・フロベール論（一八二一—一八五七）」も示しているように、ボヴァリ以後の作品は問題にされていない。『聖ジュリヤン伝』への言及が全くないわけではないが彼の主張への補強の一つとしてである。つまり、フロベールは後に『聖ジャリヤン伝』を書いたが、これはそれと知らずに予言に従って——受動的に——両親を殺すことになりそのことを通して聖者になった人物の物語である。そのように、自らの受動性にのっかって受動的に父親を殺す——馬鹿息子を宣した父親に自己の難病を通してその医学の無能を知らしめる——ことを通してフロベールは芸術家への道を選びとったのである、という。

そのように、というが、勿論事柄の順序としては『伝』の方がはるかに後である。だから強いて彼の言葉を借用すれば、遡行的分析は上の如くであるとして前進的綜合が次になされねばならないところだ。それがないのはともかく、サルトル自身、殺すには至らなかったが義父ジョゼフ・マシシーに対して激しい反撥を感じそれ故文筆の道に進んだといつてよい事実を見据えるならば、上の理解が妥当であるかというよりも、サルトル自身の感情移入に基く理解で

あると考えるのが自然である。

親殺しのテーマは古くから数多くあると思われるが、両親殺しはさほど見られないのではないか。ユリアス伝説に関してはしかし明らかに両親殺しが素材として提出されているわけだから、そしてそのことが物語の軸になっていることも確かだが、前節でふれたように筆者としては事後のジュリヤン単独の慈悲の苦行が作者フロベールの眼目であったと考えたい。

以上述べたところは冒頭に断ったように、前記拙論の補遺補註の如きものであるが、依然として調査検討が不十分で補註ともいえないかも知れない。ただ、中世に取材した聖者の奇蹟譚である『聖ジュリヤン伝』をフロベールが「何故書いたのか」という問と、「いかに書いたのか」もしくは「いかに書かれていたのか」という問と——それは作者の人間と作者の芸術を問うことで、恐らくすべての作品に関してもいわれることであるが——その両方の間に同時に過不足なく答えることをとりわけこの作品は要請していることを強調しておきたい。

註

① 「西洋文学研究第8号」

大谷大学 西洋文学研究会

② B. F. Bart, *D'où vient Saint Julien ? Situation* N° 32, 1976.

③ F. Dupanloup, 1802-78. 高位聖職者で女子教育の専門家でもある。ナポレオン三世の治下、自由カトリックの首領であった。

④ この頃いたるところで聖地への巡礼が増加する。そしてオルドル・モラルの政府は一八七三年五月、百人ばかりの代議士がパレルーモニアルに大行列を導くことによりその進路を踏み出し、その地でフランスは公式に聖心^{サクレール}に捧げられるのである。

⑤ 前記の年表参照。

⑥ H. Guillemin, *FLAUBERT — Devant la vie et devant Dieu —*, La Renaissance du livre, 1963, p. 174.

⑦ 『黄金伝説』前田・今村訳、人文書院。

⑧ 版本により章数は区々であるが、今参照する版本では一七六章からなり、問題のユリアスにあてられた分量は翻訳にして二頁と数行にすぎない。以下にその主要部分を記す。

さらにまたべつのユリアスがいる。それと知らずに父母を殺したユリアスである。(中略)「愛する両親を殺してしまった。鹿の言葉が、ほんとうになってしまった。(中略)こうなつては、もうお前の良人でありつづけるわけにはいかない。わたくしは、ここを出てゆく。さようなら、いとしい妹よ。わたしは、神に対してこの罪のつぐないをはたすまで

は、けっして安らぎを得られない身なのだ」とすると、彼女は言った。「そんなことは決してさせません。いとしい兄さま。(中略) 苦しみもいっしょに分かちあいたいのです」こうして、ふたりは、あいづれだつて旅に出、その国を遠くはなれた。そして、渡るのたいへん危険な大きな川のほとりにきた。彼等は、そこに宿を建て、川を渡ろうとする人たちを神のために渡し、貧しい人たちをだれでもそこに泊めた。こうして贖罪をはたそうとしたのである。(中略) ユリアヌスは、その人をついで家に帰り、活力を回復させるために火を焚いた。しかし、その人の身体は、いっこうにあたたまらず、このままでは死んでしまうかもしれないとおもわれたので、自分のベッドにつれていって、あたたかくふとんを着せてやった。ところがほんのしばらくすると、その人は、ベッドから起きあがった。それまではらい病人のように見えていた人が、まばゆい輝きのなかに天にむかつてすくと立ちあがり、こう言った。「ユリアヌスよ、わたしは、神からあなたのところにつかわされた者です。神があなたの贖罪を聖寵をもつてお受け入れになったことをお伝えします。あなたがたふたりは、近いうちにやすらかな眠りにつくことができるでしょう」そう言いおわるなり、その人物の姿は、かき消えた。そして、ほどなくして、ユリアヌスとその妻は、多くの善行と慈善とに飾られて主のもとにみまかったのであった。

⑨ 『聖アントワヌの誘惑』では悪魔は主要な脇役であるが、『聖ジュリヤン伝』においては殆ど出る幕がない。そこでシ

ンボリックに類者『悪魔』神と考える論者もある。参照、*Le palimpseste hagiographique, par P.-M. de Biasi, Gustave Flaubert 2, Lettres Modernes, 1986, pp. 98-101.*

⑩ 病気についてのフロベール自身の言及を晩年の手紙の中から拾ってみよう。

「七月にはアルディ博士の忠言に従ってスイスの山の中へ行き頭を冷して来ます。彼は私をヘビステリー女と呼びました。なかなか深遠な言葉だと思っています。」(一八七四)

「私の方は悪化しています。私の病気については自分でもよく分らないし、誰にも分らないのです。つまり、〈神経症〉という言葉はさまざまな現象の総体と、医家諸氏の無智とを同時に意味しているからにほかなりません。」(一八七五)

前者については、『方法の問題』の中でサルトルが、フロベールの女性的性格をあげつらい、「晩年になると医師たちは彼を神経質な老女あつかいにし、彼もそれに何となくいい気持になっていたことがわたしにわかってくる」とのべているのが符合する。後者については、神経症という言葉は術語的に用いているのではなく、ということ、医家諸氏の無智という表現の背後には圧制者で医師であった父親が思い浮べられているのは確かである。当時の大方のみたては「てんかん」説であったようであるが、今となつては断定出来ない。サルトルとは別の意味で、両説いずれであろうと『聖ジュリヤン伝』の価値が下るものではない。

(本学教授 フランス語)